
言語・心・知識

－慶應義塾大学国際研究集会に出席して－

武内道子

慶應義塾大学独自の大型研究助成の第一回目の研究対象として「言語知識と認知のインターフェイス」が採用され、その総決算として同じ名前の国際集会が3月25日（前夜祭）から29日まで開催された。

26日～28日の3日間は午前がフォーラムと呼ばれた、比較的少人数の専門家による討議、午後が公開講演。最後の4日目に言語獲得と関連性理論に関するワークショップが開かれた。フォーラムは百名以上、公開講演は二百名ぐらい、二つのワークショップも補助椅子をたくさん持ちこまなければならないほどの盛況であった。使用言語は英語で、欧米から呼ばれたゲスト以外の人にとっては母語ではなかったのだが、議論は活発で、熱気にあふれていた。

フォーラムはそれぞれの日に特定のテーマが割り当てられていた。初日のテーマは「文法と知識」というタイトルで、言語と知識との関係についてであった。チョムスキーの立場では言語研究は即、

言語の知識の研究である、したがってそれは認知科学の一部であるし、究極的には人間の生物学であるとされている。一方言語についての理論と、言語の知識についての理論は、片方が他方に対してある種の制約を与えるという形で非常に密接な関係はあるが、一応別であると考えなければまずいのではないか、その意味では、文法理論は究極的には人間の生物学にはなり得ないという議論がある。後者の代表者としてニューヨーク市立大学のJ.カッツ教授が、前者の観点でカッツの議論に反論する立場の人がロンドン大学のD.ウィルソン教授であった。（ウィルソン教授は実は9月からの私（在外研究員）の指導教授である。）二人の議論が問題提起となって、日本人3人の討論者のコメントを交え、白熱した議論が行われた。フロアからも反論が沢山出て議論が盛り上がった。こういう基礎論は重要であるにもかかわらず、日本では敬遠されがちなので今回の議論はとても有意義であった。

二日目のテーマは「学習可能性と認知」と題され、文法獲得がどんな風に進んでいくかを2人の研究者が実験によって説得的に示そうとした。文法は全部がいつに獲得されるわけではなく、あるものは確かに初めからあるとしか思えないようにときがくると現れてくるのだが、あるものはそうではなくて、その言語に即して獲得されなければならないらしいというようなことがわかってきている。日本人3人の討論者のなかに神経内科医（東京女子医大）がいて、脳研究が言語研究の中にも取り入れられ、関心が重なりあってきたことを強く思った。

三日目は「言語とモジュラリティ」というタイトルで言語知識そのものがいったいどんな性質をもつものなのかということがテーマであった。文法の内部でのモジュール性に焦点を絞って2人の外国人（ジュネーブ大学とラトガーズ大学）が話をした。言語知識に関して、赤ん坊は生まれたときは言わばデフォルト状態で同一だが、5才ぐらいまでに受け取る刺激の違いに応じて、互いに全く異なった個別言語が獲得されるということが説得力があった。

そのところが言語獲得のワークショップのテーマにつながっていくわけだが、並行して行われた、私が発表した関連性理論のワークショップについて紹介したい。言語の重要な機能はコミュニケーションの手段として用いられるということである（それが唯一の機能ではないにしても）。その場合、言語知識が具体的な状況で使われるわけだが、感覚や知覚あるいは世界に対する信念や常識といった言語以外のさまざまな情報を我々は駆使している。しかしこの場合、あらゆる知識が相互作用するというのではなく、意識はしないかもしれないがある種の原理が働いている。これは「関連性の原理」と呼ばれ、この原理についての理論を関連性理論と呼ぶ。それは人間である限り免れることができない、普遍的な原理ということでこの10年注目を浴びている研究領域である。先ほど言及したD.ウィルソンはこの原理の創設者の一人であるが、関連性理論の創設者が参加するのでこのワークショップも多くの注目を浴びたようである。ウィルソンと一緒にこの理論を強力に推し

進めているD.ブレイクモア（サザンプトン大学）もこのワークショップの特別討論者として招待された。私は彼女の関連性理論の入門書を翻訳した（1994年）が、2年半ぶりの楽しい再会であった。発表論文はアメリカとイギリスから2人、国内から3人の計5本で、その発表に対してウィルソンとブレイクモアが厳しい議論を挑み、白熱した討論が9時から夕方6時まで延々と続いた。私にとっては9月から仲間に入れてもらえるかどうかの試金石の場というような思いがあった。夜のパーティで「安心した」と言われたときはほっとした。

さてこの国際集會に参加してははっきり認識したことは、言語学が新しい展開を見せているということである。これまでの言語学は特定の個別言語に注目して、それについて観察し、できるだけ正しく記述することに焦点があったといえよう。それに対してここでいう言語学は、人間が言語を知識として受け入れており、その知識が人間の認知における一つの要素として働いていることに注目して言語研究を行うわけである。言語がしかじかのシステムをもっているとしても、いったいなぜそうなのだろうかという問いに答えることができるような説明理論を求めようとしているという点が特徴的だと思われる。言語学でやっていることが認知科学全体を引っ張ってきたということと、ここにきて言語研究者と言語以外の認知研究者との間の対話が非常に盛んになってきたことを強く感じた。これからの人間の知の研究において、言語学という一つの領域にとどまらず、他の領域の研究者との知的交流が二十一世紀に向かって非常に重要になってくる、そういう意味でこの国際集會の持つ意義は大きいと思う。

〈編集後記〉

ご研究の紹介を兼ねた、ご研究周辺の話をお寄せいただきたいというお願いに5氏の方が応じてくださった。アメリカからはるばるセンターに思いを馳せる玉稿が届き、本年度第1号があつというまに体裁を整えた。会員のお手元に届く頃、編集子は在ロンドン。ロンドンからバトンタッチします。(M.T.)